

## □ 統括的展望

### 寺西基之

#### 新型コロナによる音楽界の自粛

新型コロナウイルス（COVID-19）で世界が一変してしまつた2020年、音楽界も測り知れないほどの影響を受け、危機的状況に追い込まれた。中国で新型コロナが流行し始めたのは2019年末、年明けで2020年1月には中国で“新型肺炎”が発生したというニュースが日本でも広まったが、まだこの時点では対岸の火事でしかなく、音楽界も通常に動いており、1月末にはフィルハーモニア管弦楽団がエサ・ベッカ・サロネンと来日、名演を披露した。

しかし2月、ダイヤモンド・プリンセス号で集団感染が起こり、さらに国内でも少しずつ感染者が出てくる。それでも当初はまだ危機感は薄く、アンネ＝ゾフィー・ムターも2月半ばに来日して演奏会やマスタークラスを開いた。しかし感染者が全国に広がってきた2月下旬になると緊張が高まり、2月26日安倍首相がイベント自粛を要請、多くの演奏会が中止に追い込まれる。それでも3月中旬には幾つかの楽団や主催者が演奏会の再開を試み、アンドラーシュ・シフも来日してリサイタルを開催（この頃には外国からの入国は14日隔離が必要となっていた）、また東京・春・音楽祭も内容を変更しつつ3月半ばに始まるなど、回復の兆しが現れ始めたかにみえた。しかし状況がさらに悪化したことに伴い、小池東京都知事が3月25日に外出自粛要請を出すなどイベント自粛の動きが再び強まり、外国との往来も禁止されたことで海外演奏家の入国も不可能となって、演奏会は実質上開催が難しくなる。そして4月7日に7都道府県に緊急事態宣言が発令、16日には全国に拡大され、これで演奏会は完全に不可能になってしまった。

緊急事態宣言はやっと5月25日に全国的に解除されるが、人が集まって成り立つイベントはすぐに再開することが叶わず、多々の条件をクリアした上でやっと6月末くらいから試行錯誤を伴いながら演奏再開の動きが見られてくる。実に4か月間、音楽家、楽団やオペラ団体などの音楽団体、主催者は活動の停止を余儀なくされたのである。

#### 音楽界が受けた経済的打撃

自粛期間中は当然ながら、演奏家や演奏団体は集まることもままならず、基本的に自宅に籠ることが求められた。個人の練習はできるものの、アンサンブルの練習は不可能となり、当然それは演奏の質に大きな影響を及ぼすことになるが、それ以上に問題となったのは経済面である。演奏会が開けなとチケット収入が入らない。すでに多くの経費をかけて演奏会に備えてきたにもかかわらず、収入が断られたばかりか、演奏会中止のためのチケット払い戻しやホールキャンセル料などが発生するなど、音楽家や演奏団体、主催者の経済的な打撃は甚大なものとなっていく。フリーの演奏家は生計の道が断たれ、オーケストラやオペラ団体の多くは存続の危機に立たされた。

活動がままならない事態に直面して、3月16日に日本クラシック音楽事業協会が事業者らへの経済補償を求める要望書を政府に提出したのを皮切りに、以後関連団体を含めていろいろな形で要望を訴えていくことになるが、国の姿勢は休業による損失への補償でなく、様々な経費の支援という形が中心で、6月に主にフリー演奏家等に対する大掛かりな助成を軸とした第2次補正予算が成立したものの、オーケストラやオペラ団体など

が抱えた大きな損害を救済するようなものではなかった。

ヨーロッパではドイツの文化相が「芸術は生命維持のために必要で、特に今がそうである」と明言したように、多くの国が芸術への積極的な支援を惜しまないが、その点日本は芸術に対する認識が異なる。これは政府だけのことではなく、社会全体にいえることで、芸術団体が補償を求める声を挙げると、この緊急時に不要不急の芸術へ補償を求めるとはなにごとか、という非難の声が少なからず湧き上がった。特に西洋のクラシック音楽はいまだに外来文化としてしかみていない人がいるのでなおさらで、知識人にも芸術に対してそうした考えを持つ人は少なくない。日本では芸術への認知が社会に根を下ろしていないことがコロナ禍において浮き彫りにされたわけで、芸術や音楽が生きていく上で必要不可欠であることを社会全体に認識してもらうにはどうしたらよいかという問題を改めて考えていく必要が迫られたといえよう。

#### オン・ラインの活用～新しい方法の模索

もちろん多くの音楽家や団体は、支援を求めるだけではなく、自らこの苦難を切り拓くべく、この状況の中で今できることは何かを模索してきた。そのひとつがネット配信、オン・ラインの活用である。自粛要請が出て間もない3月初め、びわ湖ホールが、それまで1億6千万円もの製作費をかけて1年にわたって準備してきた「神々の黄昏」が公演中止に追い込まれ、代わりに2日間にわたって無観客上演を実施して無料同時配信を行ったことがその嚆矢となった。この配信は常時1万人以上が視聴し、延べアクセス数は2日間で41万人に到達、海外からの視聴も少なからずあったという。日本では例がなかった長大なオペラの同時ネット配信を準備期間のない状況で行うことは相当の冒険だったろうし、公演中止による莫大な損失が埋められるわけでもなかったが、配信でびわ湖ホールの活動を内外にアピールできた点で大きき意義があった。また時を同じくして東京交響楽団も川崎定期を無観客に切り替えて配信し、これも普段クラシックに無縁の人から多くのコメントが寄せられるなど、大きな反響を呼んだ。演奏会が中止される状況の中、文化庁がもともと助成対象となっていた団体に対し、無観客公演でも配信すれば公演助成をそのまま継続するという方針を打ち出したことが、こうした動きを促進することになる。

しかし緊急事態宣言が出てステイ・ホームが求められるようになると、演奏者が集まることもできなくなり、無観客公演も不可能になる。そこで個人が自宅で演奏したり、互いに家に居ながらネットでアンサンブルを奏でたりなど、様々にオン・ライン活用が工夫されるようになった。新日本フィルの楽員たちがそれぞれ自宅に居ながらにしてオン・ラインで曲を合奏したことは大きな話題となったものだ。ライブもあれば収録もあり、有料の配信も始まり、音楽家、音楽団体、関係者にとってネット配信は新たな手段として、その方法が様々に模索されていく。

配信の注目すべき事例として、6月のサントリーホールのレストラン・ミュージック・ガーデンと調布国際音楽祭のオン・ライン開催が挙げられよう。すでに宣言は解除されたものの、まだ演奏会開催は難しい時期のことで、どちらの音楽祭も予定されていたプログラムを変更して配信公演に切り替え、多くの視聴者を得た。調布国際音楽祭では外国からの参加も含んだリモートによるアンサンブルをはじめ、多彩な内容にチャレンジ、極め付きは鈴木雅明指揮バッハ・コレギウム・ジャパンによるベートーヴェンの「第9」終楽章のリモート合奏で、100人近いメンバーそれぞれが自宅（海外も含む）で自分のパートを演奏したものを合成するという大胆な試みが話題を呼んだ。

会場に行かなくても楽しめる配信は、遠く離れた地域の人でも観ることが出来るので、ファン層の拡大が望めるという利点がある。会ったり集まったりがままならない状況の中、オン・

ラインを通じて音楽家どうし、音楽団体どうしの横の新しいつながりがいろいろな形で形成されたことは、大きな変化であった。また調布国際音楽祭は資金をクラウドファンディングで集めるという新しいやり方を打ち出したことでも注目された。このように生き残りのための工夫は様々な面でなされていく。コロナ禍は、従来の音楽界の構造や音楽の享受のあり方など多方面で大きな変革を促したのである。

### 音楽界再始動に向けて

もちろん演奏会開催に向けての模索も一方で進められていく。5月下旬には公演再開に向けて出演者、スタッフ、観客の感染防止対策のガイドラインとロードマップを策定することを目的に日本クラシック音楽事業協会、日本オーケストラ連盟、日本演奏連盟、各地のホール等が参加するクラシック音楽公演運営推進協議会が発足、7月に楽器、9月に声楽の飛沫感染に関する科学的な検証を行なった。それに先駆けて幾つかの楽団は少しでも早く演奏会を再開するために専門家の意見を聞きながらそれぞれに実験を行い、特に東京都交響楽団は6月に取材関係者や業界関係者に公開する形で2日間にわたって「公演再開に備えた試演」を実施した。ホールでもミュゼザ川崎シンフォニーホールは、業界関係者を客と見立てて、客席やロビーの感染防止方法に重点を置いた試演会「キープディスタンス・コンサート」を開いている。

そうした動きを背景に、6月終り頃から演奏会が次第に復活するようになる。しかしステージ上や楽屋での奏者間のディスタンスを配慮し、舞台上に密を作るような演目や飛沫の問題が大きい声楽作品を避けるために予定のプログラムを変更しなくてはならず、外国からの渡航制限によって海外演奏家は呼ばず、さらに50%の入場制限、検温や消毒などの感染防止対策を施さなくてはならないなど、主催者は様々な問題に直面することになった。特に大きな影響があったのが、舞台上に多くの奏者が乗ることになるオーケストラである。オーケストラの演奏会が本格的に開かれるようになるのはやはり6月下旬のことで、東京フィルと東京交響楽団が一早く客を入れての定期演奏会を再開、7月上旬には新日本フィルと日本フィルなどがそれに続いたが、舞台上のディスタンスの取り方、プログラムの組み方（従来のような休憩入りの2時間プロカ、休憩なしの1時間プロカ）など、再開当初は楽団ごとに対応の仕方がかなり異なり、各楽団がそれぞれに事情を抱えつつ、自ら基準を定めながら（さらに使用するホールの基準もそこに絡んでくる）、今できる形を模索していることを窺わせた。来日不可能となったジョナサン・ノットの収録映像の指揮によって演奏するという平時ではあり得ないような東京交響楽団の大胆な試みも、この状況の中で考え出された苦肉の策だった。

こうした再開の動きを大きく後押ししたのがミュゼザ川崎シンフォニーホール主催のフェスタサマーミュージックKAWASAKIで、当初予定されていたプログラムや出演者の一部の変更は余儀なくされたものの、本来の日程通り18日間に17公演を実施、首都圏のほぼ全ての楽団が出演し、オーケストラ活動の再始動に弾みをつけるとともに、全公演の配信も併せて行い、出演者のインタビューや舞台裏の風景なども織り込む工夫された作りで全国の音楽ファンを楽しませた。各地の夏の音楽祭が軒並み中止に追い込まれた中、このフェスタサマーミュージックの果敢な取り組みは高く評価されるべきだろう。8月末の現代音楽の祭典であるサントリーホールサマーフェスティバルも開催にこぎつけ、その一環である芥川也志作曲賞も例年通り実施された。

声楽は歌の飛沫の問題ゆえにオーケストラよりもさらに演奏会のハードルは高くなるが、8月初めにバッハ・コレギウム・ジャパンはオケと合唱の配置を工夫した形でバッハの「マタイ受難曲」を上演、また東京混声合唱団は「歌えるマスク」を開

発し、ステージ上のディスタンスをとりつつ、このマスクを用いて演奏会を開催し、合唱再開の道を開いた。オペラはさらに難しいと懸念されたが、8月半ばに藤原歌劇団が、舞台上にオケを乗せ、その手前で接触を避ける工夫を施した演出によってフェイスシールドを付けた歌手が演技をしつつ歌い、オケの後方に合唱を置くという形で「カルメン」を上演、さらに9月初めに東京二期会がオケはピットに入れ、紗幕の後ろで舞台上の歌手がディスタンスを大きくとって歌う形で「フィデリオ」を取り上げるなど、試行錯誤の夏でオペラも再開されることになる。9月の新国立劇場の「夏の夜の夢」では来日できなくなった演出家レア・ハウスマンが海外からオン・ラインでリモート演出を手掛け、全て日本人に変更された出演者とともにコロナ禍の中ならではの舞台を作り上げた。

### 再開後の状況

こうして9月以降、演奏会は次第に活気を取り戻してくるが、上述のようにプログラムと出演者の変更を余儀なくされ、入場制限ゆえのチケット払い戻しや席の再配分、チケット購入者への連絡など、主催者の苦勞は絶えない。客席制限は9月19日に撤廃されたものの、コロナが収束していない中でチケットを買い控える人も多く、コロナ以前のように客が戻ってこない状態が続く。

外国演奏家の来日が叶わない中、オケやオペラでは日本人演奏家が代役として起用され、演奏会の出演者はほぼ日本人になった。ベテランや長老の指揮者は引っぱりだこで大忙しになり、また若手指揮者の活躍の場が増えた。ソリストも同様だが、一部のベテランに偏りがちだった傾向は否めない。いずれにせよ、戦後これほど演奏界が日本人一色になったことはなかっただろう。コロナ禍は日本人演奏家の底力を示す機会にもなったのである。

10月に入ってカーチン・ウォンが九州交響楽団の定期に出演、新国立劇場の藤倉大「アルマゲドン」では演出家リディア・シュタイアーが来日するなど、やっと外国人の訪日が可能にはなるが、14日の隔離待機が必要など難しい条件をクリアする必要があるため、数はきわめて限られた。そうした中で11月上旬、ウィーン・フィルが国家間レベルの交渉によって特例的に来日したことは驚きの“事件”であった。ホテルでの完全隔離を条件に14日待機が免除された特例措置は様々な議論を呼んだが、久々に外国から来たこの名門オケの演奏が日本の音楽界を潤したことも事実だろう。12月に入るとセバスティアン・ヴァイグレが読売日本交響楽団に、ジョナサン・ノットが東京交響楽団を振りて来日、どちらの楽団も久々のシェフとの共演が大きな成果をもたらした、また高齢のヴラディーミル・フェドセーエフも広島交響楽団定期のために来日した。

合唱が入るために年末恒例の「第9」は無理だろうという事前の予想にもかかわらず、多くの楽団が合唱を少数精鋭のプロの合唱団に切り替えるなどして公演を実現させるなど、12月には日本の音楽界も正常化へ向けての動きが見えてきていた。

しかし本稿を執筆している2021年1月現在、まともな感染拡大による外国からの渡航禁止や入場制限など、その動きに再びストップがかかっている。ワクチンが一般化するなどしてコロナが収束するまでは、今後もこうした一進一退が続くだろう。音楽家、演奏団体、事業者の苦境はまだまだ続くことになりそうだが、そうした中、日本フィルが資本金劣後ローンを導入するなど、存続をかけての新しい動きもみられる。そうした様々な模索が今後音楽界・音楽業界のよい形での再構築に結び付くことを願うばかりである。